



Title	Human Capital Accumulation in Developing Countries : The Role of Education, Fertility and Migration
Author(s)	逸見, 宜義
Citation	大阪大学, 2006, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/46720
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	逸見宣義
博士の専攻分野の名称	博士(経済学)
学位記番号	第19978号
学位授与年月日	平成18年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 経済学研究科経済理論専攻
学位論文名	Human Capital Accumulation in Developing Countries: The Role of Education, Fertility and Migration (途上国における人的資本蓄積:教育、出生率、移住の役割)
論文審査委員	(主査) 教授 二神 孝一 (副査) 教授 三野 和雄 助教授 小野 哲生

論文内容の要旨

本論文は、途上国における人的資本蓄積に影響を及ぼす要因、特に学校教育、出生率、移住機会の存在に焦点を絞り分析を行う。

第1章では経済成長と教育水準の関係、ならびに教育が経済の生産性に及ぼす影響に関する既存の実証研究について鳥瞰し、第2章から第4章にかけて個人が教育投資を行う際に大きな影響を及ぼすと考えられる要因と経済成長の相互関係に関する新たな理論的考察を行う。

第2章では貧困における高出生率の原因としての側面に注目する。高出生率は家計全体での教育費用の負担を大きくし、結果親が提供する教育の質の低下をもたらす。これに伴い子供の努力水準の低下が予想される。これが高出生率を原因とする貧困のメカニズムであり、したがって子育てのための機会費用の増加は高出生率を伴う貧困の罠から抜け出すための選択肢の一つと成り得る。

第3章では移民機会の存在に伴う途上国からの頭脳流出問題について考察する。本章では移住に伴い固定費が発生するモデルにおいて、移民機会が個人の教育投資に及ぼす影響について考察する。頭脳流出問題を伴いながらも移民機会が経済の人的資本形成を促進させる要因となりうるのは移民機会が教育投資の誘因と成り得るからであるが、移住に伴い固定費用が発生する場合においてはこの様な教育投資への誘因としての側面が常に観察されうるわけではないことを指摘する。これにより長期と短期では移民機会の存在が人的資本形成に及ぼす影響はまったく違ったものになる可能性があることを示す。

第4章では頭脳流出問題が人的資本蓄積に及ぼす影響について再考する。本章では頭脳流出による教育投資の効率性への影響は無く、また頭脳流出は労働者の実地訓練による技術の獲得に負の影響を及ぼすと仮定する。経済が貧困の罠から抜け出すための政策として労働者の移出規制を行う場合、その経済が直面している賃金格差と教育による人

的資本蓄積の弾力性によっては、貧困の罠回避のためにとるべき移出規制がまったく違ったものになる可能性があることを指摘する。

論文審査の結果の要旨

本論文は出生率と教育の関係を明らかにすることで、家計の出生率選択と教育水準選択の結果、成長の罠に経済が陥る可能性を明らかにしている。また移民による頭脳流出が経済成長によい結果をもたらす条件を分析している。これらの分析は経済発展の問題を分析する際に非常に重要な知見を与えるものである。以上から、博士（経済学）に十分に値すると判断する。